

創立120周年記念号

村岡花子と東洋英和

村岡 恵理

今からちょうど100年前の1904(明治37)年、カナダ・メソジスト派の宣教師によって建てられた東洋英和女学校が創立20年を祝う年に、ひとりの少女がこの学校の寄宿舎に入りました。

安中はな、当時11歳

それから10年にわたって東洋英和で受けた教育、過ごした日々がこの少女の人生を決定づけたと言っても過言ではありません。欧化主義政策に代わって台頭してきた国家主義により、日本国内の官の教育は富国強兵を目的とした忠君愛国の教育になりつつありました。そのためにキリスト教主義の学校は、学校として認めず、各種学校の資格しか与えないなどという政府からの圧力もありましたが、第10代校長に就任したミス・ブラックモアはそうした動きには屈せず、東洋英和女学校においては創立以来のキリスト教に基づいた人道的教育を続行しようと決意を新たにしました。こうした近代社会における女子教育に捧げられたカナダ婦人宣教師たちの情熱と奉仕の精神が、ひとりの少女に新しい時代の担い手としての使命を与え、のちの翻訳家・評論家村岡花子を育てました。

生徒の大半が華族という特権階級の令嬢が占めている中、裕福とはいえない茶商人の娘であった花子は、父親と東洋英和創設者であるカナダ・メソジスト派の宣教師や牧師との信仰上の繋がりから、給費生(いわば特待生)という形で在学を許されました。生まれ故郷の山梨県の甲府教会で、花子は2歳のときにやはり東洋英和創設者のひとりである小林光泰牧師から幼児洗礼も授かっていますから、生まれながらにして英和とは縁のようなもので結ばれていたのかもしれない。とはいえ、当時の一般の家では、女の子が尋常小学校より上の教育を受けることはほとんどなかったもので、父親の熱心な信仰が、



山梨英和教員時代

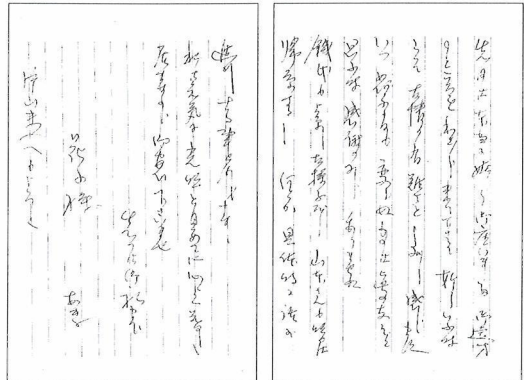
花子に学問の道をつけたと言ってもいいと思います。また、花子自身が幼いころから、父の詠んだ歌をいつのまにか覚えてしまったり、7歳で大病をした時には「まだまだと思ひ過ごしておるうちに はや死の道へむかうものなり」などと辞世の句を詠んで両親を泣かせたり(元気になるとあっけらかんとまた一句「学び舎に帰ってみれば桜花 今を盛りに咲き誇るなり」と詠ん

だ)、早くから言葉に敏感な感受性を発揮していたので、父親としてはこういう花子の資質を伸ばしてやりたいとの願いがさらに強まったのでしよう。

親元を離れ11歳で英和に編入した花子は、カナダ人婦人宣教師たちのもと、徹底した英語教育を受けます。寄宿舎生活では朝、目覚めて夜寝床に着くまでの生活も含めて教育とみなされ、校長ミス・ブラックモア考案の60 sentencesは暗誦することで規則正しい生活と英文法の基本が身につくようにつくられていました。英語の授業の厳しさもさることながら、さまざまな学科の日本語の授業とは別に、同じ教科の授業が、カナダ・オンタリオ州発行の教科書を使用して英語でも行われていました。給費生というのは学費が免除されるかわりに学課の成果が思わしくない場合は退校という境遇でもあったので10代の花子はひたすら勉強に忙しい毎日でした。さらに寄宿舎きっての文学少女だった花子は「乙女盛りというべき日々を明けても暮れても図書室の片隅で本を読んで過した」そうです。そして、15、6歳のときには、図書室の書架にぎっしりつまった英米文学の古典をすべて原書で読みあさる程の語学力を身につけていました。上級生になると、あまり英語が得意でない生徒の家に家庭教師に行くよう先生から頼まれたり、文学会では英詩の暗誦をするなど、先生からも同級生からも「英語のお花さん」と一目置かれていたようです。高等科の卒業式には生徒を代表して「日本婦人の過去、現在と将来」と題した英文の卒業論文を読み上げました。その最後には「いつの日か、私たちが夢見ているキリスト教女子大学も現実となるであろう」とあり、さらに、テニソンの『イン・メモリアム』からの一句、「古き制度はかわりゆく、新しきものに場所をゆずりつつ」を以て結びとしたとあります。

また、美しい年上の同級生、柳原輝子さん(のちの歌人柳原白蓮女史)との友情から、歌人の佐佐木信綱門下に紹介していただき、その後10年間、門下生として和歌や日本の古典文学の世界にも深く傾倒します。文学を目指す同志たちに大いに刺激を受け、一時は本気で歌人を目指そうと思ったこともあったようでした。さらにここで東洋英和の大先輩であると同時に、文学者としても大先輩である片山廣子さんと出会

ったことによって近代文学に目覚め、女性が仕事を持つことがまだまだ難しい時代でしたが、文筆家としての自立の意志を抱くに至ります。



村岡花子宛、柳原白蓮書簡(天正10・12・17の消印)

先日は本当に嬉しう御座いました 御遠方のところをわざわざ来て下さって 斯くいふ時こそ友情の有難さをしみく感じます

いつ如何なる日も 変わらぬものはよき友ぞと思ふ時 感謝の外ありません

鐵氏も上京した様子だし山本さんも明日は帰京するし 何か具体的に話が進行する事と存じます

私共元気に光明を目あてに心よく暮らして居ますので御安心下さいませ

先づは御礼まで

花子様

あき子

*片山夫人へもよろしく

*片山夫人は片山廣子(1894年本科卒)のこと

友情や学問的・文学的素養のみならず、花子が得た大きなものは、この学園に滔々と流れていたキリスト教的ヒューマンイズムの精神、つまり「敬神奉仕」の精神でした。カナダ・メソジスト派の宣教師たちにとって教育という事業そのものが純粹な奉仕活動でした。現世の報酬を求めず自らを戒めながら働く献身的な教師たちの姿は花子の心に深く刻まれました。王女会(King's Daughter's Society)という課外活動では、生徒たちはめいめいに靴下を編んだり、ハンカチを縫ってはバザーで売り、得た収入で恵まれない子供たちの学校を開いていました。その他、校内に設置された基督教婦人矯風会の公娼制度廃止運動や少年禁酒運動などを通して、女性や子供たちの精神と身体を守るために闘う婦人たちに触れ、こうした活動の中で、社会に目を向け、たとえ小さくとも、自分のできることで誰かのために働くということを実践的に学んでいきました。

21歳で高等科を卒業後、山梨英和女学校の英語教師、銀座教文館の編集者を経て、1919(大正8)年、銀座と横浜で聖書・賛美歌の印刷を一手に引き受けていた福音印刷株式会社を営む村岡徹三と結婚します。妻となり母となりながらも、自分は何を書くべきかを模索し続けました。少女たちの読む雑誌に少女小説のようなものを書いたり、キリスト教関係の書物の翻訳をしたり、童話の創作を試みたり、夫の愛情と支えの中で花子は文筆家という少女期の夢を少しずつ実現させていきました。

しかし、人の真の魂の強度や純度は、人生の順風のときではなく、逆風のときにこそ明らかになるものなのではないでしょうか、30歳になったばかりの花子を試さんとばかりの逆風が吹き荒れました。1923(大正12)年、関東大震災で夫の事業は灰燼に帰すとともに、百人近くもの従業員が圧死し、ふたりは背負い切れない責任と多額の負債を負うこととなります。これを機に花子のペンが生計を支える手段と変わり、文筆の中でも翻訳が仕事の8割を占めるようになります。「芸が身を助くるふしあわせ」ではありませんが、窮地の中で、秀でた花子の語学力というのが最大の武器となっていったわけです。震災の痛手から奮起する花子に、まるで追い討ちでもかけるように、さらなる悲劇が襲います。まる3年後の1926年9月1日、満6歳を迎える長男道雄が疫痢にかかり、わずか一昼夜で忽然と世を去ってしまったのです。

そんな花子の悲しみを我がことのように思い、幾度も励ましに訪れてくれたのが、同窓の柳原燐子さんと片山廣子さんでした。道雄死去の知らせを受けて病院まで駆けつけてくださった柳原燐子さんは「道雄様の霊に捧ぐ」としていくつかの歌を詠んでくださっています。

いねられず君がひとり子亡ひし

その死顔を見て来し夜は

母がつくるおとぎばなしの本なども

棺に入れぬ見るに得たえず

ペンを持つ気力も、本を開く気力も信仰もすべて失って、数ヶ月という日々をただただ悲嘆に暮れて過ごしている花子の元に片山廣子さんはマーク・トエインの*The Prince and The Pauper*を置いていかれました。ある日この本を繙き、数ヶ月ぶりに読書に没頭したのち、花子の母性はひとりの母親という個人的なものから、より

広い社会的なものへと成長を遂げていました。「自分の子は失ったけれど日本中の子供たちのために上質な家庭文学の翻訳を自分の道としよう」と、文筆における自分の歩むべき道、天から与えられた仕事を見出したのです。

翌年の1927(昭和2)年、平凡社から翻訳『王子と乞食』が出版されました。布製で天金が施されている美しい装丁のこの本の巻頭には「わが幻の少年道雄の霊に捧ぐ」という、花子の人生の記念碑ともいえるささやかな献辞が添えられています。

それからというもの、カナダ人宣教師仕込みの英語力と、佐佐木信綱門下で磨かれた美しい日本語の表現力とが融合していくかのように、村岡花子の翻訳家としての道が開いていきました。E・ポーター、オルコット、バーネット、G・ポーター、パウル・バックなどの作品を次々に訳出しました。そして「いつかカナダの文学を日本の読者に紹介したい」との思いを抱くようになりました。また、1932年からJOAKのラジオ番組『子どものしんぶん』を担当し、「村岡のおばさん」として全国的に親しまれました。花子の「全国のお小さい方々、ごきげんよう！」や「ごきげんよう、さようなら」という極めて英和的挨拶は寄席に物まねが現れるほど名物となりました。

しかし、国内はしだいに軍国色が濃くなっていきます。1939(昭和14)年頃から、在日の外国人たちは次々に帰国を急ぐようになり、花子も翻訳の仕事が続けるのが難しくなってきました。銀座の教文館で花子とともに編集の仕事にあっていたカナダ人宣教師、ミス・L.L. ショーは、別れ際に一冊の本を花子に手渡しました。*Anne of Green Gables by L. M. Montgomery*でした。愛する祖国の物語として何度となく読み返されていたのでしょうか、その時既にかなり手ずかっていたのです。

本を読み進むにつれ花子は衝撃を受けました。カナダのプリンス・エドワード島の自然描写の美しさ、アンという不屈の魂を持った少女の魅力はもちろんですが、物語の随所に明治・大正期の母校との共通点を見出したのです。

花子は、マリラやリンド夫人の衣装や髪型、アンの憧れの「ふくらんだ袖のドレス」を容易に思い浮かべることができました。モスリンやオーガンジーという生地質感、お茶の時間に出

てくる砂糖漬けやパウンド・ケーキの味もよく知っていました。

それもそのはず、この原作は花子が英和に在学していた1908(明治41)年にアメリカ、ボストンのページ社から出版されており、つまり作者であるL. M. モンゴメリは、東洋英和の宣教師の先生方とまさに同時代の同じ文化を纏ったカナダ婦人だったのです。そればかりか、モンゴメリ自身がやはり教師の経験を持ち、牧師夫人でもあったため、物語の中で繰り広げられる学校生活、アンが暗誦するテニスやブラウニングの詩や、叱られた時に受ける罰則、少女たちが学校の行事で披露する活人画や対話といったプログラムもリアルに東洋英和でのカナダ人による教育法と重なったのです。そして何よりこの物語の根底に、花子は、厳しさの中にも、温かさやユーモアを秘めた東洋英和のクリスチャン・ヒューマニズムと同類の精神が流れていることを確信しました。

花子は戦争が激しくなる中、家中の原稿用紙をかき集めて翻訳を始めました。それは花子にとって、自分を導いてくださった先生方やミス・ショーをはじめとするカナダ人の友人たちへの「友情の証」でもありました。空襲警報が鳴ると原書と書きかけの原稿用紙は風呂敷に包まれて家族と共に防空壕に避難し、家族共に戦火を逃れました。そして、戦争が終わるころ翻訳も終わり、出版のあてなどない782枚の原稿用紙が積み上がっていました。

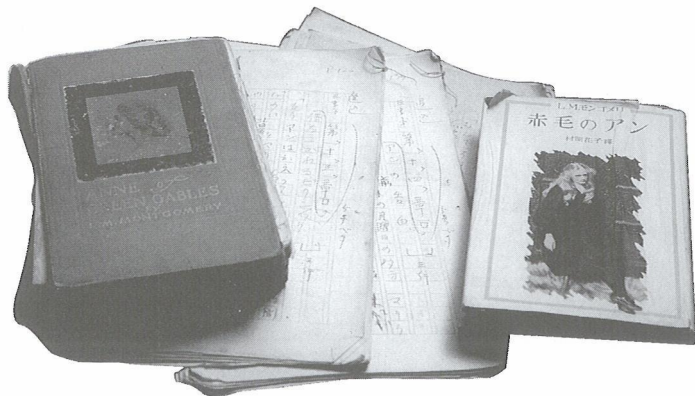
戦後しばらく、その大切な原稿は本棚に置かれたままでした。原書を手にしてから13年という月日が経ち、花子が60歳を迎えようとしていた1952(昭和27)年、三笠書房から『赤毛のアン』

として初めて出版されました。当初花子は『窓に倚る少女』というタイトルにしようと思っていましたが、娘みどりの「ダンゼン『赤毛のアン』がいい」という意見により、ぎりぎりですべて『赤毛のアン』に差し替えられました。

初版のあとがきにはこの物語に込めた母校、東洋英和への特別な思いが語られています。『赤毛のアン』は花子の想像すらはるかに超えて、日本中の読者に愛される大ベストセラーとなったため、出版社の意向で残念ながらあとがきのこの部分はのちに削られてしまったのですが、この場をお借りしてご紹介致します。

「……アメリカ合衆国の土に続いていながら、カナダの人々の性格はアメリカ人ともイギリス人ともちがった意味での明るさと素朴さの特徴としているようです。日本人とカナダの婦人宣教師たちの協力によって創立された東洋英和女学院70年の長い歴史の一つの時代に、あの学園で生活をした私は、英語をカナダ人の教師から学びました。西洋人との私の接触は学生時代から現在に至るまで主としてカナダ人を中心として続いて来ております。カナダ系の作家の作品を紹介したいという私の念願は、今日までに多くのカナダの教師たち友人たちから受けたあたたかい友情への感謝からも出発しております。我が国出版界の貧困の一つは健康な家庭文学の乏しさにある現在、若い世代の永遠の寵児ともいべき「赤毛のアン」を世に送ることの出来るのに無上の喜びを感じながら、この訳業を麻布の丘の母校にこもる若き日のおもいでと、今ここに学びつつあるわが心の妹たちにささげます。

1952年の春



(左) Anne of Green Gables ボストン・ページ社、1908年12月出版 (中)「赤毛のアン」直筆翻訳原稿
(右)『赤毛のアン』初版 三笠書房、1952年

東京大森において

村岡花子 』

その後、6年間でアン・シリーズ全10巻を訳了し、亡くなるまでにモンゴメリの作品全21巻中、計16巻を翻訳出版しました。

文筆以外でも戦後の花子は多忙を極めました。

1952(昭和27)年から大森の自宅の一部を亡くなった息子の名前にちなんで「道雄文庫」と名づけ、近所の子どもたちに図書館として開放しました。これはその後、日本全国に広がる家庭文庫活動の第1号と言われています。また、1955年のヘレン・ケラー来日の際は、飯田橋の富士見町教会での講演の通訳を務めました。その他、日本ユネスコ協会連盟副会長、NHK理事、中央青少年問題協議会委員、郵政、通産、文部各省関係の審議会委員などの役職に就き、仕事と家庭を両立させた女性の先駆者として、あるいは、国際人として、社会的な発言をする機会を多く得ました。そういった社会的な活動と同時に、母校東洋英和女学院の理事・評議員、短大保育科の非常勤講師も務め、1968(昭和43)年、75歳で亡くなるまで、どんなに忙しくても母校との繋がりを大切にしていました。

花子は、自分から生れた翻訳作品や創作童話、社会的な発言さえも、すべて元を辿ればひとつの種から出ていることを忘れなかったのだと思います。その種こそ母校東洋英和の教育で、自分が受けた教育を、日本中の子供や女性たちに、自分に与えられた表現方法で還元することに精一杯生きた生涯だったと言えるでしょう。花子が咲かせた花の中でも、『赤毛のアン』は50年もの月日の中でもみずみずしさを失わず、今なお美しく咲き続け日本中の読者に愛され続けています。

「家族・教育・共存」をテーマにしたこの物語は、むしろ殺伐とした現代だからこそ、私たちに必要になってきているようにも思われます。そして、東洋英和の関係者の皆様には、この不朽の名作の中に感じられる母校の初期宣教師方の息吹や、翻訳の際に込められた卒業生、村岡花子の恩師への感謝と平和への切なる願いを憶えていただきたいと思いました。

以下、晩年の随筆『学ぶ生活』の一部です。

『『すべてのことが忘れ去られた後に残る一つのもの、それが教育である』という言葉がある。人格の感化をさしているのだろうか、あわただしく、雑事に追われている主婦の生活の中では、かつての年月に学んだ知識は忘れ果てても、教師の言行を深く心に刻みつけられ、生活の指導をその中から得ていることがしばしばある。私においては、長い年月変わらずに追求している学問の中に、勤勉に、謙虚にあくまで学んでいた教師の感化を意識するのである。そしてその感化はたんに書斎の生活だけでなく、あらゆる面において生きていることを感ずる。教育は実に偉大な事業であることを私は感じ続けて生きている。』

(1986年高等部卒)

お知らせ

村岡花子随筆集

赤毛のアン記念館・村岡花子文庫発行

★『改訂版 生きるということ』

★『をみななれば』

花子の東洋英和時代の思い出、人生観、家庭観、教育観、同性へのメッセージなど、現代にも通じる随筆を再編しています。(各1800円)

ご希望の方は赤毛のアン記念館・村岡花子文庫または、東洋英和史料室まで

『赤毛のアン記念館・村岡花子文庫』

オープンハウスについて

赤毛のアン記念館・村岡花子文庫では月に2～3回、オープンハウスとして村岡花子の書斎を公開しています。予約制ですのご希望の方はホームページをご覧ください。

東京都大田区中央3-12-4

(TEL 03-3771-0870 FAX 03-3771-0687 村岡)

<http://club.pep.ne.jp/~r.miki/>

※史料室 E-mail: archive@toyoeiwa.ac.jp
FAX: 03-3583-3329 (直)

〈思い出の先生がた〉 8

カートメル先生の思い出

原田知津子

1924(大正13)年、母富美子は1歳の私と、ひとつ違いの姉田鶴子(1940年高女科卒)を連れて、仕事の関係でカナダ・トロント市にいる父平井六郎のところへと旅立ちました。以後1934(昭和9)年までの10年間、私はトロント市で少女時代を過ごす事になりました。当時は現在と違ってトロント市に日本人は2、3家族しかおらず、私共姉妹2人と後に生れた妹瑠利子(1945年高女科卒)と弟俊一はカナダの子供と全く同様に育てられ、日本語の会話も読み書きも出来ない始末でした。姉が満12歳、私が満11歳になった1934年、両親は、日本の教育を受けさせるために私共を日本へ帰す大英断を下しました。

トロントを離れる前に父母は帰国後の私共の教育方法について随分悩み、当時母が尊敬しご指導を受けておりましたMiss Prestonに相談致しました。Miss Prestonは元宣教師でご自宅にて毎日曜日の午後Bible Class(聖書研究会)を開き、トロント大学で勉強中の日本人留学生や数少ない日本人家族、また、時折トロントに出張の商社の社員に、英語の勉強を兼ねた聖書の研究を通じてキリスト教の布教をしておられました。

大正時代の三輪田女学校を卒業した母は全くキリスト教の知識もたず、英語もろくに話す事も出来ませんでしたので、Miss Prestonの存在は救いの手であり、異国における母代わりとしてお慕っていました。毎日曜日のBible Classに必ず参加し、幼い姉と私もお供をさせられ、母娘共々キリスト教に関心をもつようになりました。

この間、Miss PrestonのBible ClassにMiss Cartmellとおっしゃる、日本に長年宣教をされた老婦人が参加されました。当時すでに90歳近い年齢でしたが、お背が高く姿勢がまっすぐで



いらして、朗々としたお声でご自分の人生において受けられたキリスト様の影響とお導きについて熱心に話され、その若々しいお声が子供心に強い印象として残っております。Miss Cartmellに紹介された母は早速娘達の日本での教育について相談申し上げると、カートメル先生から1884年に東京で創立されたカナダのミッション・スクール東洋英和の存在を初めて知らされました。更に当時の校長 Miss Hamiltonのご発案で、年々増える日本の帰国子女のためのSpecial Class(別科)が設けられていると教えられ、私達をそこに入学させる事をすすめ、ご紹介を頂きました。この上ない素晴らしいご提案に大喜びの母は、私達姉妹の東洋英和入学を強く希望し、調べてみると、以前トロント大学に留学され、お世話を申し上げた吉本てふ様が現教員であることも分かりました。

こうして、1934年、母は4人の幼い子供を連れて同年4月の初め、桜咲く日本に帰国しまし

た。当時はまだ飛行機がなく、トロント市からバンクーバー市までCanadian National Railways (CNR)で1週間かかり、更に横浜まで日本郵船の氷川丸で2週間の船旅でした。海は荒く寒く旅路のほとんどは船酔いで寝たきりでしたが、初めての日本語「水を下さい」をスチユアドに言う事が出来ました。帰国すると早速、母とともに東洋英和を訪ね、吉本先生やMiss Hamiltonにご挨拶に伺いました。麻布の鳥居坂にあった東洋英和の校舎は前年に新築されたモダンな様式で当時としては珍しく全館暖房付きの立派な建物でした。周囲は高級住宅地で知名人のお屋敷に囲まれた女子教育に理想的な環境でした。学校の両側の道にガス灯が並び、その趣深い情景は時おり映画の撮影に利用されていたのを覚えております。

Miss Cartmell, Miss Hamilton、吉本先生のお力添えで1934年に東洋英和に入学することができ、1941年に高等女学科を卒業するまでの7年間は、戦争をはさみ波瀾万丈の時代でした。最初の2年間は、遅れておりました日本語の勉強に追いつくため、Special Class (別科)で受け持ちの秋山春子先生から厳しい特訓を受けました。小学1年から6年までの読本を2年間で済ませ、1936年に1年遅れではありましたが、姉は3年に、私は2年に編入させて頂きました。

1934年の入学の年の秋に東洋英和の創立50周年記念式が盛大行なわれ、トロントでご健在のMiss Cartmellは89歳のご高齢に達して居られましたがお元気なお姿のお写真とともに下記のお祝いのメッセージを学校へ送ってこられました。

To the Alumnae and Friends, of the Azabu W.M.S. Girls School, Tokyo. It is with profound consciousness, that I write of Divine Guidance, throughout, more than the 50 years, we now survey. The Lord startled me saying "I Am the Almighty God! Walk before Me and be thou perfect!" "I will help thee ! I will Guide thee, with My Eye" !!!

Dear Friends, let us love and pray!!!

Miss Cartmellは1945年に3月20日にトロント市で100歳の高齢で天国へ召されたと伺っております。しかし、お亡くなりになる前の5年間は太平洋戦争の最中であつたので、恐らく創立され最後まで愛された東洋英和とは音信不通であり、手塩にかけた多くの卒業生や先生方とは会わずにこの世をお去りになったことと存じます。70年前に幸運にもお目もじでき、直接に教えを頂いた者として、僭越ながらこのMiss Cartmellの思い出を書かせて頂きました。

2004年に創立120周年を迎える東洋英和はMiss Cartmellの夢を遙かに越え、現在は幼稚園から大学院まで、約5,000人の生徒を誇る東京の一流名門校になりました。120年前に一人の若き女性Miss Cartmellが灯した小さな蠟燭が、多くの有能で立派なカナダの先生方に刺激を与え、その方々が立派な後継者になり、日本の社会、世界各国に数多い卒業生を送り出す結果となりました。

(1941年高等女学科卒)

ミス・カートメル略歴 (Martha Julia Cartmell)

1845年12月14日 カナダ オンタリオ州ソロルドに生まれる
— 年 トロント官立女子師範学校卒業
1865年 ハミルトン官立女学校教員及校長
1881年 カナダ・メソジスト教会婦人伝道会社日本派遣婦人宣教師に志願
1882年12月27日 来日
1883年 築地居留地にて伝道開始
1884年 東洋英和女学校初代校長となる
1887年4月 帰国
1892年 再来日、甲府伝道へ
1896年 帰国
1945年3月20日 逝去 (享年99歳)

〈資料紹介〉 6 村岡花子の本 — 翻訳・随筆

最近史料室に入ったものの中から、幼児向け絵本の翻訳、児童文学や小説の翻訳、物語以外の翻訳、本人の随筆、という4つのカテゴリーに分けて、作品をいくつかご紹介いたします。

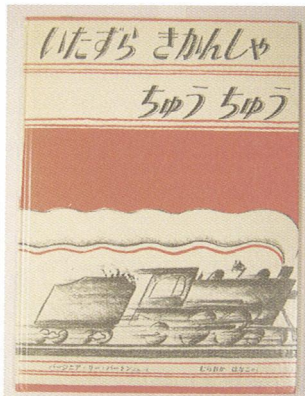
〔絵本〕

笹川 奈緒

バートン

『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』

毎日同じことが繰り返される日々から解放されたいと思ったことはありませんか？ 同じ時間に起き、同じ電車に乗り、同じ仕事をして家



路につく…。でもこの繰り返しがどんなに貴重でかけがえのないものなのかを、村岡さんが訳したこの絵本は教えてくれます。

本屋の絵本コーナーへ行くと必ず店頭に出ており、誰かしらが手に取っています。特に電車の大好きな子どもなら真っ先に近寄ってページをめくるでしょう。そんな子どもたちの目を釘づけにするのはこの絵本の主人公「機関車ちゅうちゅう」です。ちゅうちゅうは、小さな町から大きな町までたくさんのお客と荷物を乗せて走ります。ある日そんな毎日に飽き、自分の素晴らしさをもっとたくさんの人に見てもらいたいと思ったちゅうちゅうは、いつもとは違う線路を走り、挙げ句の果てには迷子になってしまいます。そんなことをしても、いつもちゅうちゅうの面倒を見ている3人の機関士たちは必死に探します。そしてちゅうちゅうが見つかるとういそう喜ぶのです。そんな姿を見たちゅうちゅうは、心に誓います。「私はもう逃げたりしません」と。普段していることが一番喜ばれることを、そして自分のことを心から大切にしてくれる人たちがいることに気づくのです。心が枯れかけている皆様、この絵本で心に水を注ぎませんか。

『日本イソップ繪物語』



私の母は、私が幼い頃、寝る前には必ずイソップ物語を話してくれました。今でもそれは耳に残っており、

口にすることができます。今になってそんなにも覚えているのはなぜだろうと、ふと思う時があります。この夏、村岡さんの『日本イソップ繪物語』を与えられ、あつという間に読み終えた時、101編もの物語が次々と再び巡りました。登場人物が子どもにとって身近な存在(例えば動物や両親)であり、内容が素晴らしくまとまっているのです。今になって思うと、私は幼少期に何か怠けることがあると、「ウサギとカメのウサギになりますよ」と言われたものです。現代の子どもたちは、同じことを言われてどれほどわかるのでしょうか？

イソップ物語は、2600年ほど前の小アジアに生まれたイソップが語ったことが始まりとされています。日本では桃山時代から「伊曾保物語」の名で親しまれていました。世界的に流布されたその物語を、村岡さんは昭和8年に新たに日本に誕生させたのです。日本の子どもたちに喜ばれるように、また昔から語り継がれている物語を新しい時代の子どものたちへ受け継がれるようにと、村岡さんの母心がこの本には込められています。また挿絵だけでも幼子たちが楽しめるように当時の最新の印刷術が使用され、色鮮やかに仕上がっています。村岡さんの最上の母心を感じるこののできる1冊です。

(幼稚園教諭・史料室委員)

〔児童文学・小説〕

ウィーダ 『フランダースの犬』
エレナ・ポーター 『パレアナの成長』

叶田 光恵



私たちが小さい頃から親しんでいる『フランダースの犬』。それを書いたウィーダの作品の中に「ニュールンベルクのストーブ」という物語がある。村岡さんは、『フランダースの犬』と共に訳し、1冊の本にまとめている。

オーガストという9歳の少年の家には、大変美しいストーブがあったが、事情で手放さなくてはならなくなった。オーガストはそのストーブの中に隠れて一緒に売られていき、骨董品が集められている所に行き着いた。そこでは、夜中に骨董品たちがおしゃべりをしたり、ダンスを踊ったりする、という不思議な物語だ。最後に、オーガストが王様の前でひざまづく場面があるが、この時王様はオーガストにこう言う。「ひざまづくのは君の神様にだけなのだよ」と。

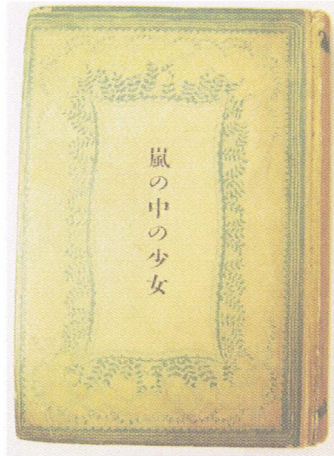
村岡さんはこの作品を、英和に通っている時にミス・ブラックモア先生から紹介されたのと、あとがきの中に書いている。さらに「私の中に強く流れている英文学への愛情と研究心は、ブラックモア女史によって、培われたものである」と結んでいる。

『パレアナの成長』は、私たちの心を豊かにしてくれる物語だ。パレアナは、幼い頃に母を亡くし、牧師の父も天に召されるが、以前父が教えてくれた「喜びの遊び」を忘れないでずっと続けていく。これは、どんなことの中にも、うれしいことを探す遊びであり、探すのが難しければ難しいほどおもしろい、と考え、周りの人たちもそれに影響され、幸福を見つけていくという話だ。

(小学部教諭・史料室委員)

ディケンズ 『嵐の中の少女 他7編』

大井 みどり



村岡さんはまえがきの中で、これらの物語は19世紀イギリスの作家「ディッケンズの書いた傑作からとったもの」であり、「ディッケンズの小説の筋の運びを、作中に活躍する少年少女

を中心にして示したもの」と述べている。そして「これらの物語を読むことにより、読者が、物語の中の人物に美しさやゆかしさを感じたなら、自分たちは日本人としてその数十倍、数百倍、ゆかしく、雄々しい心を養っていかねばならないと決心してください」と記している。この言葉は、この本が出版された昭和17年、日本が太平洋戦争の真っ只中にあったという事実を抜きにしては考えられない。村岡さんは、ディッケンズの作品の中に、当時日本の敵国であるイギリスが誇る作家の作品を紹介するということをしてまでも伝えたい「高い精神とゆたかな愛情」を感じていたのであろう。

この8編の短編には、19世紀イギリスで産業革命が進み、貧富の差が拡大した頃の、貧しい人々が持つ「高い精神とゆたかな愛情」を伝えた作品が集められている。その中から二つ紹介する。

「嵐の中の少女」…「古い骨董店」をもとにした作品。真の幸福は金持ちであるということではない、ということ。

「曲馬團の娘」…「苦しい時代」より。目に見えない愛と想像の世界があることを教えられ、そういう世界に遊ぶことを知っている者は幸せ。そして人の世の中で、「一番貴い事実は愛心と希望と信仰」だと結んでいる。

(小学部教諭・史料室委員)

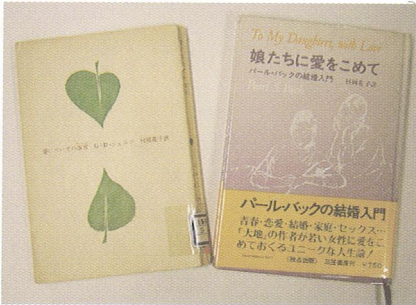
〔物語以外の翻訳〕

坂井 知

G.D.シュルツ 『愛についての^{ゼミナール}演習』

パール=バック

『娘たちに愛をこめて
— パールバックの結婚入門』



ここでご紹介する2つの翻訳は、いずれも結婚や性に関することをテーマとしている。

前者は、ある母親と、大学の寮で暮らしている娘との間に交わされた書簡という形式になっている。娘のジェーンは大学に入り、当然ながら恋愛の問題に直面する。自分の体験から感じたこと、また友人の体験から考えたこと、いろいろな疑問を母親に投げかけ、母親はそれに冷静に、丁寧に答える。内容はかなり具体的で、親子では面と向かってなかなか話ができないような事柄にも踏み込んでいる。最初はジェーンとだけだったのが、彼女が寮の友人たちに手紙のことを話し、彼女が友人のことも母親に相談を持ちかけ、母親はそれになるべく一つ一つ答えるようにするので、ジェーンの友人とジェーンの間にも手紙のやりとりがなされていく。彼女たちは、自分の親には相談しにくい事柄を率直に書く。ジェーンは母親はそれに真摯に答える。

母親のアドバイスは、結論から言えば保守的・伝統的で、ある意味ピューリタンの性道徳に根ざしていると言えよう。ただし、それを大上段に振りかざして、あれはダメ、これはダメ、というのではない。これを避けるためにこういう注意をしなければならない、こういう配慮をしなければならない、と非常に具体的で、かつ

丁寧に意見を述べていく。知らず知らずのうちに、読者もジェーンや友人たちの立場になり、一緒に母親の話に耳を傾けているかのような錯覚に陥る。かなり踏み込んだ内容にもかかわらず、決して嫌みがなく、読後も非常に爽やかである。

後者の作品は、アメリカ人女性として初めてノーベル文学賞を受賞したパール=バックが、やはり自分の娘のために書いたものである。作者には娘が一人しかいないが、表題が「娘たち」となっているということは、作者が自分の娘のみならず、第2次世界大戦後に大きく変わったアメリカの結婚観・性倫理観に強い危機感を覚え、多くの若い女性に向けて書く必要があると感じたからであろう。

この書と先ほどのシュルツの作品と違うのは、パール=バックは中国での生活が長く、アジアの伝統的な結婚のあり方に強く影響を受けていることだろうか。

作者自身、結婚にはいろいろ複雑な思いがあるに違いない。作者の両親の結婚は、苦難に満ちていたと言っている。20世紀初頭の清朝末期の中国で、宣教活動に熱心なあまり家のことは妻に任せっきりだった父。最悪の衛生状態で病気の子たちを抱えているのに(うち何人かは死亡)、夫の助けがなく一人で家を守らなければならなかった母。その両親を見て育った作者は、大学で学ぶためアメリカに渡るものの、中国に戻ってきて宣教師の夫と結婚するが、やがて離婚をする。「幸せな結婚とは何か?」ということ、絶えず考えていたに違いない。この作品は作者が75歳の時に出版された。非常に冷静な文体に、作者の魂が込められているように感じる。

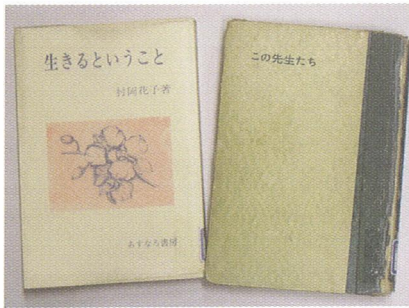
筆者はこの2つの作品を選ぶにあたり、なぜどちらも結婚なのかと疑問を持ったが、村岡さん自身、戦後日本の女性が社会へ進出する一方で、恋愛観・結婚観が大きく揺らいでいくことに危機感を覚え、結婚や性に関する本を何冊も出版していることがわかった。この2冊は、その一連の流れの中に位置づけられるであろう。

(高等部教諭・史料室委員)

〔随筆〕

古澤 育恵

『生きるということ』



村岡さんの娘みどりさんのあとがきによれば、村岡さんをご主人の倣三氏の7周忌である昭和44年2月までに、夫亡き後の生活をつづった随筆集を出す計画を立てていたが、そのご本人が思いがけず前年10月に急逝されたため、一周忌に遺稿集としてこの作品を出版されたそうである。

「結婚をめぐって」(昭和37年)から、亡くなる直前の「大阪の休日」(昭和43年)に至るまで、家庭や仕事のこと、出会った人や出来事について、あるいは日常の中でふと考えたこと、翻訳した作品の主人公たちについてなど、それぞれ素直に書かれている。その飾らない文章は大変読みやすく、村岡さんに親しみを覚えると同時に心の伸びやかさ、しなやかさのようなものが感じられ、すがすがしい読後感である。根底には少女期に東洋英和で培われた確たる人間観があり、気負わず媚びることなく、家庭と仕事を大切に自分の人生を生きてきた人の言葉として真摯なものとなっている。

表題作「生きるということ」は、成人の日のメッセージである。モンゴメリー『赤毛のアン』とオルコット『昔かたぎの一少女』から、二人の少女の生き方を紹介し、人生の曲がり角を勇気を持って賢く歩み、自分の幸福だけでなく周りの人たちをも慰め励まして、共に明るく生きていくことの大切さを語っている。その他、6歳で息子さんを亡くされたこと、ご主人の印刷会社が関東大震災で焼け落ちた後の苦労、そのご主人を亡くされたことなど、村岡さん自身の人生

の様々な曲がり角が淡々と述べられていて、真摯に人生を生きた人の言葉として重みを感じる一冊である。

『この先生たち』

各界の著名な女性が、幼稚園から一人前になるまでに会った先生方の中から、思い出深い先生方について書いた随筆集で、曾野綾子や宮城まり子らと並んで、村岡さんが東洋英和の先生方について書いている。

多くの先生方の中でも、とりわけミス・ブラックモアを「正義の化身のようであった」と評し、「人生に対し、揺るがぬ信念を持っており、それを教え子たちの心に植えつけようとしていたことをひしひしと思い知った」と述べている。

ある日アメリカの飛行機が飛来し、生徒たちがそれに見とれていると、花子の肩に手を置いたブラックモア校長が、航空技術の発達によって人々が行き来して国と国とが了解を深めるようになれば、戦争にならないだろうという希望も持てるが、飛行機が平和に利用されるのか戦争に利用されるのか、それは我々の上にかかっている、と語ったエピソードを紹介している。そして第1次世界大戦より前に幼い生徒にこう語った女史の言葉を、後に太平洋戦争の最中に思い出し、「『ああとうとう……人間は遂に飛行機を戦争に利用することを学び、原爆を空飛ぶ利器に負わせ、悲惨な殺人が白昼至るところに行われるところまで来てしまいました、ブラックモア先生!』と声のない叫びをあげた」と述べている。村岡さんにどれほどの影響を及ぼした先生であったかがよくわかる。

最後に東洋英和での先生方との交わりの中で、「民主的の自主性のある教育」を受け、それが自分のものの考え方の根底をなしている、と結んでいる。それは「人格」形成の場であったということであり、翻って、今日の英和の教育の指針のようでもあり、このような交わりを持った村岡さんのその後の人生を思う時、教育の場に立つ者として、襟を正す思いにさせられた一冊であった。

(中学部教諭・史料室委員)

村岡花子関係資料（1）－東洋英和女学院所蔵の図書

〔翻訳〕

書名	原作者	所蔵先*
赤毛のアン	モンゴメリ	史・小・中高・大・か
アンの青春 または 続赤毛のアン	モンゴメリ	史・小・中高・大・か
アンの愛情	モンゴメリ	史・小・中高・大・か
アンの友達	モンゴメリ	史・小・中高・大・か
アンの幸福	モンゴメリ	史・小・中高・大・か
叛逆荘のアン または アンの愛の家庭	モンゴメリ	史・小・中高・大・か
アンの夢の家	モンゴメリ	史・小・中高・大
アンをめぐる人々	モンゴメリ	史・小・中高・大・か
虹の谷のアン	モンゴメリ	史・小・中高・大・か
アンの娘リラ	モンゴメリ	史・小・中高・大・か
王子と乞食	マーク・トウェイン	史
丘の家のジェーン	モンゴメリ	史・中高・大
可愛いエミリー	モンゴメリ	中高・大
エミリーはのぼる	モンゴメリ	中高・大
エミリーの求めるもの	モンゴメリ	中高・大
雨に歌うエミリー	モンゴメリ	史
果樹園のセレナデ または 果樹園物語	モンゴメリ	史・大
美しいボリー	モンゴメリ	史
パットお嬢さん	モンゴメリ	中高
続パットお嬢さん	モンゴメリ	大
ハックルベリー・フィンの冒険	マーク・トウェイン	史・中高・大
フランダースの犬	ウイニグ	史・中高・大
クリスマス・カロール	ディケンズ	史・中高・大
聖書物語	ヴァン・ルーン	史・大
花ざかりのローズ	オルコット	史・中高
少女パレアナ	エレナ・ポーター	中高
パレアナの青春 または パレアナの成長	エレナ・ポーター	史・中高・大
スウ姉さん	エレナ・ポーター	史・中高・大
アルプスの少女	ヨハンナ・スピリ	史
ハイジの子どもたち	C. トリッテン	大
八人のいとこ	オルコット	史・中高
昔かたぎの少女	オルコット	大
そばかすの少年 または そばかす	ジーン・ポーター	中高・大
リンバロストの乙女(上)	ジーン・ポーター	中高
リンバロストの乙女(下) または 続リンバロストの乙女	ジーン・ポーター	史・中高・大
中共の子供たち	M. ウィリー	大
母の肖像 または 母の生活	パール・バック	史
花咲く家	ペリー	史
ケレー家の人々	ケート・ウィギン	史・中高・大
ナンシー姉さん	ケート・ウィギン	史
パレエシューズ	ノエル・ストレットフィールド	史
あしながおじさん(続)	ウェブスター	中高
べにはこべ	オルツイ夫人	史
アンディとらいおん	ジェームズ・ドハーティ	史・幼・大・か
いたずら きかんしゃ ちゅうちゅう	バーミア・アーバートン	史・幼・大・か
ごきげんならいおん	L. ファテオ	幼・大
イソップ童話集		大
アンデルセンどうわ集		大
グリム童話集		大
女王物語	マリオン・クロフォード	小
いばらの冠の王さま イェス・キリストの一生	ノルマン・F・ラングフォード	史・大
黄色い猫の秘密	エラリ・クィーン	大
叫べ、愛する国よ	アラン・ペイトン	大
薔薇のロザリンド	K. ノリス	大

書名	原作者	所蔵先*
神の榮光	H. モロウ	大
ジェーン・アダムスの生涯	ジャッドソン	史・小・中高
ピーターという男―妻の描いた夫の肖像	キャスリン・マーシャル	史・大
ジェーンの手紙 または 愛について演習	G. D. シュルツ	史・大
エミリー・ディケンズ―世に与えた少女の手紙―	P. ロングワース	大
娘たちに愛をこめて パール・バックの結婚入門	パール・バック	史

〔著作・編著〕

書名	所蔵先*
強い美しい女王の話・優しい孝行なお嫁の話	史
日本イソップ繪物語	史
学年別新選童話集一年生 青イクト	史
特選童話 一年生の巻	史
小学生童話2年生	史
緑の島	史
愛情	史
エステル物語	史・大
母心随想(随想集)	史
光に向ふ(随想集)	史
母心抄(随想集)	史
隨筆集 雨のなかの微笑	史・大
隨筆集 心の饗宴	史
親と子	大
ママと子ども ― ママへの注文12章 ―	大
ピノッキオ	大
ピーターパン	大
こびととくつや	大
長くつをはいたねこ	大
二つのどくろ	大
さびしいクリスマス	大
夢のやうなおはなし	大
少年三吉	大
ナイチンゲール	小
嵐の中の少女	史
わが少女の日	史
生活の流れに棹さして	大
生きるということ(遺稿集)	史

〔共著・その他〕

書名	所蔵先*
子どものしつけ相談室	大
この先生たち	史

*史：史料室 幼：東洋英和幼稚園 小：小学部図書室
 中高：中高部図書室 大：大学図書館 か：かえて幼稚園

なお、『ハックルベリー・フィンの冒険』『丘の家のジェーン』『フランダースの犬』『クリスマス・カロール』(いずれも新潮文庫版)の著作権は学院にご寄付いただいております。印税は毎年、図書購入等教育のために有効に用いさせていただきます。この場を借りて村岡家に感謝申し上げます。

<訂正とお詫び>

No.62の6頁右側、東久遼久子は文子様の誤りでした。訂正してお詫び申し上げます。